

研究成果報告書サマリー (H23-B-05)

[専門研究B]

特別支援学校(病弱)のセンター的機能を活用した 病気の子ども支援ネットワークの形成と情報の共有化に関する研究 (平成22年度～23年度)

【研究代表者】 西牧 謙吾

【要旨】

本研究においては、現在の病弱教育の諸課題を解決する手立てとして、特別支援学校(病弱)のセンター的機能を強化し、病弱教育に携わる教員間の日常的な情報交換を全国的に可能にするために、特別支援学校(病弱)で行われている学校教育活動に関する教育情報の蓄積と活用のための教育情報共有システムの構築を行った。併せて、精神疾患を例に、病弱教育担当教員間の情報共有が容易になる「事例提示・事例記述の方法」のフォーマットを作成し、それにより精神疾患のある子どもを支援する情報共有の様式に道筋をつけることができた。

【キーワード】

特別支援学校(病弱)、ICT活用、センター的機能、情報共有システム、精神疾患

平成24年3月



独立行政法人国立特別支援教育総合研究所
National Institute of Special Needs Education

【背景・目的】

病弱教育を行う特別支援学校、分校、分教室、特別支援学級(院内学級)、通級指導教室、訪問教育先は地域に点在しており、学校管理、運営面で大きな制約を受けている。また、入院治療や長期療養により、児童生徒は、学力の遅れが大きい上に前籍校の友達との人間関係面で心理的不安も高いことから、退院後の前籍校に復帰できず不登校になる児童生徒も少なからず存在する。病弱・身体虚弱教育を担当する教員数も少なく、病弱・身体虚弱教育に関する専門性の維持が困難であるなどの課題も多い。

これらの諸課題を解決する一つの方法として、いくつかの都道府県の特別支援学校(病弱)レベルで、ICTを活用した組織的な取組がみられるようになったが、地方レベル、全国レベルの展開までには至らず、日常的な学校教育活動に関する教員間レベルでの情報共有のやりとりはほとんど行われてこなかった。

そこで、本研究では、センター的機能につながるように、特別支援学校(病弱)で行われている学校教育活動に関する教育情報の蓄積と活用のための教育情報共有システムの構築を行うことを目的とした。併せて、全国病弱虚弱研究連盟と協力して作成中の支援冊子を更に発展させるために、支援冊子のこころの病編の疾患別冊子作成を念頭に置き、精神疾患等の心の病気のある児童生徒の事例研究を通して、病弱教育担当教員間の情報共有をより容易にするための「事例提示・事例記述の方法」のフォーマットを作成することを目的とした。

【方法】

(1) 病弱教育担当教員間における病気の子どもの教育情報共有システムの構築

支援冊子「病気の児童生徒への特別支援教育～病気の子どもの理解のために～」の作製の際に用いたICT利活用による編集システムを応用して、以下の①、②を行った。

① WEBを活用した特別支援学校(病弱)のセンター的機能としての情報発信システム構築

全病連傘下の6か所の地区病連から、ICT推進委員(17名)を選出し、全体による研究協議とWEB上での継続的、継時的な協議を行い、WEBによる情報発信の方針を固めた上で、ICT推進委員が、地区病連ごとに、独自の情報発信様式について検討し、それらを取りまとめることで、全国の特別支援学校(病弱)のセンター的機能を担保する情報発信システムを構築した。

②特別支援学校(病弱)、病弱・身体虚弱特別支援学級で行われている指導事例や領域・教科の学習指導案を蓄積し共有するためのシステム構築

各学校で指名されたICT担当学校代表(78名)から、研究授業等における学習指導案を提供してもらい、WEB上に蓄積し、病弱・身体虚弱教育における学習指導案データベースを構築した。

(2) 精神疾患等の心の病気のある児童生徒の教育情報を共有するための事例フォーマットの検討

(1)と同様に、支援冊子編集で活用したICTの仕組みを適宜組み合わせ、以下の①、②を行った。

① 事例フォーマット検討のための組織作りおよびシステム作り

全病連の中で組織されている4つの研究推進委員会の一つである「心身症等研究推進委員会」の中で、事例フォーマットを検討するワーキングチームを立ち上げ、本研究の推進母体とした。支援冊子編集で活用したICTシステムにより、随時、事例に関わる協議と検討が可能にする研究環境を整備した。

② 病弱教育担当教員による情報共有を容易にするための「事例フォーマット」の検討

検討ワーキングチームの中から、関東甲信越地区で児童思春期精神科の入院施設がある病院に隣接した特別支援学校(病弱)でコアチームを作り、コアメンバーを中心に各学校の1事例を持ち寄り、事例検討を重ねた。コアメンバーは、収集した実践事例を基に、精神疾患等の心の病気のある児童生徒の教育支援のための事例集作製に必要となる『事例提示・事例記述の方法』を検討し、事例フォーマットの試案を作成した。

【結果と考察】

(1) 病弱教育担当教員間における病気の子どもの教育情報共有システムの構築

NetCommonsにより構築した情報共有システムである、平成19年度から作製した支援冊子作製のための「NISE HEALTH CENTER」と、平成22年度から全病連心身症等研究推進員会会議室及びICT推進に関する会議室を運用する「ZENBYOREN」を、「病気の子どもの教育支援」をトップページとし、リンクを張ることによって形式上の一元化を行った。トップページにおいて、保護者、学校教職員、全病連会員のそれぞれを対象とした情報発信

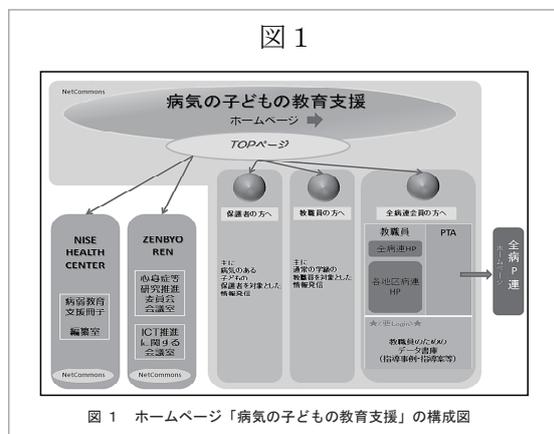


図1 ホームページ「病気の子どもの教育支援」の構成図

の入口を用意し、対象を明確にし、それぞれの対象のニーズに応じた情報発信が可能となるようにした。これらの情報発信は、NetCommonsのパブリックスペースにて行っている。本システムにおける指導事例や領域・教科の学習指導案の蓄積は、各地区病連ICT担当者が所属する学校において2010年以降に行われた公開授業、研究授業等の学習指導案を収集することとした。「病気の子どもの教育支援」のグループスペースを用いて行うことで、ある一定のアクセス制限を設定して限られた関係者間で情報共有が可能となるようにした(図2)。

今後の運営は、全国特別支援学校病弱教育校長会、全病連と連携して、病弱教育班として継続して維持管理を行う予定である。既に平成19年から運用している支援冊子ポータルサイトは、毎年指名される執筆者だけでも利用できるまでになった。また、研究所ホームページで公開している支援冊子は、多くの保護者や医療関係者が自分のホームページやブログ等で紹介するほど人気サイトになっている(どの検索エンジンでも、支援冊子でトップに出てくる)。支援冊子は、児童生徒が前籍校に復帰する際に行われる連絡会の資料として使用されたり、小中学校教員の研修にテキストとして利用されたりしている。ホームページ「病気の子どもの教育支援」と支援冊子とを連動させることによって、病弱教育を担当する教員からの的確な情報発信を行い、特別支援学校(病弱)のセンター的機能をより一層充実させることが可能となると考えている。



図2 キャビネットに収集された学習指導案の掲載状況

(2) 精神疾患等の心の病気のある児童生徒の教育情報を共有するための事例フォーマットの検討

事例研究を通じて実践知を共有するためには、「了解可能であること」と「共感可能であること」という2つの観点で事例フォーマットを組み立てると共通理解が図りやすいという結論を得た。「了解可能」とは、記述された情報を基にして、読み手が「精神疾患等の心の病気のある児童生徒、教員の内側と外側で生じている体験を知的に理解できること」を、「共感可能」とは、読み手が「児童生徒の体験と教員の体験、さらにはそこに生じているダイナミクスに、情緒的に共感できること」を指し示すものと定義した。この2つの観点を満たすためには、単なる客観的事実を羅列するのではなく、より具体的で情緒的な体験を記述することが必要であると考えられた。そこで、疾患や障害の特異性を含んだ、ある特定の子どもと特定の教員とのエピソードを複数提示することで、そこに生じている内的なダイナミクスを共有できるよう工夫した。研究結果には、教員が自分で工夫した記述を、上記の視点で書き直したものを例示した(A2、B2)。

精神疾患等の心の病気のある児童生徒の教育の充実を考える上でも同様の状況があり、こうした既知の理論枠組みや先行研究を参照することが困難な事態にあっては、指導実践から指導に関わる知見を抽出し、整理し明らかにしていく研究プロセスが有効であると考えられた。

【成果の活用】(成果の活用について、具体的に例を示すなどして記述する。)

この研究で構築したWebを活用した情報共有・発信のための仕組みは、全病連の4つの研究推進委員会(「筋ジス研究推進委員会」、「慢性疾患研究推進委員会」、「脳性まひ等研究推進委員会」、「心身症等研究推進委員会」)で既に活用が始まっている。全病連全国大会は、各推進委員会の2年間の研究成果を基に分科会等を運営できるようになり、活発な討議ができるようになった。その研究成果の一部は、小児保健研究など査読付き論文として発表することができた。精神疾患に関しては、全国児童青年精神科医療施設協議会(全児協)と協力関係を結び、支援冊子作成(精神疾患総論編)への協力をはじめ、今回の研究でも医療側からのアドバイスをいただいている。